

短 報

離島におけるスポーツ・クラブの実態  
—— 宮城県牡鹿町網地島「長渡バレーボール  
愛好会」の事例研究 ——

丸山 富雄, 本多 弘子, 仲野 隆士, 永田 秀隆

**Present condition of island community sport club**

—— A monograph study on “Futawatashi” community volleyball club, in “Ajishima”, Oshika town, Miyagi prefecture ——

**Tomio Maruyama, Hiroko Honda, Takashi Nakano and Hidetaka Nagata**

In order to study community sports activities, it is necessary to clarify the meaning and values of sport though resident's daily lifestyle as well as relationship between characteristic of the club and social structures. In this paper, a present condition of the island community sport club from an above point of view is examined.

“AJISHIMA” is characterized by isle, depopulation, and aged society. As for social environment, the number of children is extremely few and usually young residents and male adult residents do not live in the island because of their jobs. In such a poor environment, “FUTAWATASHI” community volleyball club was organized in 1979. In spite of no stable group foundation and decrease of membership, the reasons for community sport club being continued to present day are following 4 factors,

1. teacher's support and their school's support
2. instructor's leadership
3. existence of each member as a community leader
4. value of leisure activities in relation to island daily lifestyle

These factors specify the uniqueness which come from island daily lifestyle. On the other hand, they also specify the meaning and value of sport toward member's lifestyle and their way of life.

For the reasons mentioned above, “FUTAWATASHI” community volleyball club was born out of necessity and grew naturally from island daily lifestyle and also it can be expressed as a community sport club which adhere closely to their lifestyle.

**Key words**: community sport club, sport and lifestyle, isle, depopulation, aged society

はじめに

地域のスポーツ活動に関する研究は、中山<sup>8)</sup>によって整理・総括されるように、単なる実態調査や実践報告の段階から、より住民の生活や

生産活動と関連させた基礎的、実証的研究の段階へと質的な深化をみせている。すなわち、スポーツが人びとの生き方や生活の中でどのような位置を占め、そこにどのような意味や価値を付与しているかという研究視点である。このよ

うな視角こそが「コミュニティ・スポーツ」や「スポーツ政策」を論じる際にも基礎的な研究としてまず必要であろう。

住民の生活把握を基底としたこのような研究には、たとえば松村<sup>2)3)</sup>や中島<sup>5)</sup>、長屋<sup>4)</sup>らの研究がある。しかし、そこにある種の「物足りなさ」を感じるのは、あまりにも「生活」や「家族」を強調し、その分析や考察にのみ焦点を絞りすぎる結果、本来の研究目的であった人びとにとってのスポーツの意味や価値が不問にされたり、置き去りにされてしまっているからではないだろうか。また、このような行為論的アプローチの欠陥でもあるが、地域の社会構造やスポーツ体制、さらには日本社会全体の社会構造の変化との関連が捨象され、切り放されてしまう危険も伴う。人びとの生活の中で生き生きとしたスポーツ活動の解明と、同時にスポーツが何故そのような存在なのかを構造的脈絡の中で把握することが必要であろう。

本研究はこのような問題意識から、宮城県の網地島を事例にとり、島の人びとの生活とスポーツやレクリエーションに関する一連の実態的・縦断的研究の予備的ノートとして、島のバレーボール・サークルである「長渡バレーボール愛好会」の実態について、特に地域の生活との関連から報告する。

## 1. 網地島の社会構造

宮城県牡鹿町網地島は、牡鹿町の中心地、鮎川から約4キロの洋上に浮かぶ面積6.43 km<sup>2</sup>、北西・南東方向に約6 kmの細長い島で、鮎川、石巻からそれぞれ1日3往復の船が運航している。島の南東部に長渡浜、北西部に網地浜の二つの集落があり、島の中央に集落を結ぶ県道が走っている。島には網長小学校（児童数6名）、網長中学校（生徒数18名）、学校給食センターのほか、診療所や郵便局、公民館分館、また離島開発センターなどの生活・行政施設がある。人口はピーク時には3348名（昭和35年国勢調査）

であったが、平成8年6月現在住民登録人口では749名と減少した激しい過疎地区である。また過疎地区の特徴でもあるが、網地島も65歳以上の高齢者が49.4%を占める典型的な高齢地区でもある。古くから島の青壮年層のほとんどは遠洋漁船の乗組員として、また近年はタンカー船にも多くの島民が従事し、年金の受給年齢（だいたい55歳）になると船を降り、島での生活をおくるようになる。したがって、現実には実際に島で生活する島民人口は住民基本台帳に登録された人数を大きく下回り、特に高校生を含む青年層の男女と壮年男性が極端に少ないという特徴を持つ（表1）。またここ20年ぐらい前からの進学率の高まりと平行して子どもの高校進学を機に若夫婦世帯が石巻等に転出するケースが多くみられるようになり、過疎化に拍車をかけると同時に、児童・生徒数の急激な減少を生んでいる。小学校児童数のピークは昭和35年の571名、中学校は昭和37年の288名であった。したがって、この35年間に島民人口は約20%に、児童・生徒数は約3%へと激減したことになる。

このように網地島の社会環境は、離島、過疎、高齢化という特徴に加え、子どもの数が極端に少なく（現在、未就学児は3名）、また青壮年層の不在という極めて劣悪な環境にある。しかし、見方を変えれば、網地島は現代日本社会、特に人口の空洞化した都市中心部や山間・農漁村が直面する解決すべき諸問題の凝縮された地域ともいえよう。

## 2. 「長渡バレーボール愛好会」の結成とその存続要因

「長渡バレーボール愛好会」は、昭和54年4月、PTAバレーボールの練習がきっかけとなり設立された。網長中学校では生徒数の減少から部活動の数も制限され、近年ではバレーボール部だけとなり、結果的に町内でも有数の強豪校となっていた。その影響でPTAのバレー

表1 網地島の登録人口および在島人口  
( ) 内生活本拠地を島外にもつ独身教員

年齢層	登録人口			在島人口		
	男	女	計	男	女	計
0-4	1	2	3	1	1	2
5-9	2	2	4	2	2	4
10-14	10	9	19	10	9	19
小計	13	13	26	13	12	25
15-19	10	21	31	2	1	3
20-24	13	5	18	2 (6)	0 (4)	2 (10)
25-29	13	4	17	0 (4)	0 (3)	0 (7)
30-34	4	4	8	0	3	3
35-39	14	4	18	5	3	8
40-44	13	15	28	4	11	15
45-49	28	23	51	14	18	32
50-54	18	25	43	7	19	26
55-59	30	28	58	24	26	50
60-64	30	51	81	27	50	77
小計	173	180	353	85 (10)	131 (7)	216 (17)
65-69	57	54	111	57	52	109
70-74	44	49	93	44	46	90
75-79	34	57	91	32	55	87
80-84	20	29	49	20	25	45
85-89	8	15	23	7	12	19
90-		3	3		2	2
小計	163	207	370	160	192	352
計	349	400	749	258 (10)	335 (7)	593 (17)

(平成8年6月14日現在の住民基本台帳登録人口および同時期における島民からの聞き取り調査により作成)

ボールにも熱が入り、当時から町の大会でよく優勝をしていた。ちなみにPTA会員数の減少した最近でも、網長中学校PTAチームは町の大会(町P連大会)で、平成2年から優勝5回、準優勝1回の強豪である。他にほとんど余暇活動のない若い母親達が、大会期間中だけでなく年間を通して、またPTA会員を退いても継続してバレーボールがしたいということから愛好会設立に至った。その意味では、愛好会の結成は自然生長的であるといえよう。

当初20名の会員でスタートし、5年間は20名以上の会員を擁し、また設立から10年ほどの間は、中学校教員を含めると2チームが編成で

き、町の大会の決勝で「愛好会」A、Bチームが当たることもしばしばあったという(表2)。しかし、前述のように、離島による会員の退会が相次ぎ(これまでの退会者の6割以上)、現在は実質的には島民8名、それに中学校教員3名を加えた11名で、年3回の町内の大会を一応の目標に活動が続けている。過去には町内の大会で幾度となく優勝した強豪チームであったが、最近は人数不足もあり、会あるいは会員の目標も、試合で勝つことから、バレーボールを通しての健康づくり、気分転換、また人びととの交流や生活の充実におかれている。

中島<sup>7)</sup>は、地域スポーツ集団が存続していくために必要な外部的条件の一つに「安定した集団的基盤」をあげている。愛好会結成から今年で18年目を迎えるが、網地島では若者が少なく、またUターン者や就職や結婚等で新たに島民になる者もほとんどいないことから、「長渡バレーボール愛好会」は会員の補充という面では安定した集団的基盤のないクラブである。PTAや地区でのバレーボール(各部落対抗の「コミュニティ・バレーボール大会」は今年で11回目を数える)が盛んであるとはいえ、会員の減少の中で、愛好会が今日まで存続してきた理由として、次のような要因が働いていると考えられる。これらの存続要因はまた、一方では島の生活に起因する必然的な特殊性を明らかにするとともに、他方で会員の生活や生き方の中でのスポーツ(バレーボール)の意味や価値を明示するものであろう。

① 学校ならびに教員の協力(島の学校としての地域との一体性)

② 指導者のリーダーシップ(社会的性格および社会的地位)

③ 会員の地域リーダーとしての存在(島の生活・文化の実質的な担い手)

④ 島の生活(少ない余暇活動、夫の不在、就寝時間の早さなど)

以下、これらの内容について、島の人たちからの聞き取り調査の結果に基づき具体的に記述

表2 「愛好会」歴代会員の属性と会員期間

No	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	会 員 期 間				
							S54	59	H1	6	8
1	35		○	○	△	○	—				
2	34	バレー		×	△		—				
3	32	バレー	○	×	×		—	—			
4	35	バレー	○	×	×		—	—			
5	33		○		△	○	—				
6	37	バレー		×	×		—	—			
7	30	バレー		×	×		—	—			
8	31	バレー	○	×	×		—	—			
TO	36	テニス	○	○	△	○	—	—	—		
10	37		○	○	△	○	—	—	—		
11	36	バレー	○	×	×		—	—			
12	38		○	×	×		—	—			
SA	30		○	※		○	—	—	—	—	
14	27			男	△		—	—			
15	30		○	男	△		—	—			
16	32		○	×	△		—	—			
17	37			×	×		—	—			
EA	24	ソフト	○	○		○	—	—	—	—	
19	25	バレー	○	×	×		—	—	—		
20	38		○	○	△	○	—	—			
21	37		○	×	△		—	—			
22	33	バレー	○	×	×		—	—	—		
23	27	バレー	○	×	×		—	—	—	—	
24	31	バレー		×	×		—	—	—		
25	32	バレー		×	×		—	—	—		
26	27	バレー		×	×		—	—	—		
MS	33	バレー	○	×		○	—	—	—	—	
28	36		○	×	×		—	—	—		
29	39	バレー		×	×		—	—	—		
NA	33	卓球	○	○		○	—	—	—	—	
HA	19	テニス	○	×		○	—	—	—	—	
32	24	卓球		×	×		—	—	—		
33	32	バレー		×	×		—	—	—		
KA	27	テニス	○			○	—	—	—	—	
YA	33	ソフト	○	×		○	—	—	—	—	
KO	35	ソフト		×		○	—	—	—	—	
37	36			○	△		—	—	—	—	

ア：入会時年齢  
 イ：学校時代のスポーツ歴  
 ウ：網地島出身者  
 エ：夫の在島の有無（×：遠洋漁船員，タンカー船員，※在島，現在死別）  
 オ：退会理由（×：子どもの進学を機に離島，△：その他）  
 カ：現在の在住者

することにしよう。

### 3. 学校ならびに教員の協力

島の小中学校には、小学校の調理員(3名)を除き、現在25名の教職員がいるが、小学校の臨時業務員と中学校の教諭(教務主任)1名、技師1名の3名以外は、生活本拠地を島外にもち、行事のない週末にはそれぞれ帰省している。彼らは管理職も含め、ほぼ3,4年で異動となる。また、教職員は若く、先の3名と、小中学校の校長、教頭、および小学校の教務主任を除いた17名は、島に住民登録をしているが、いずれも20歳代で、教職経験も2,3年といったところである。島の人たちは、彼らのことをやや皮肉を込めて「旅人」と呼ぶが、島や閉鎖的な地域の特徴であるが、彼らが島の生活に馴染み、とけ込む(そうせざるを得ない)と、大変な歓迎や援助を得ることができる。

愛好会の練習は、週1,2回、2時間程度、中学校の体育館で行われる。ネットやボールの提供は勿論、この日は若い教職員はほとんどが練習に参加し、愛好会の練習相手となる。会員はそのお礼として、夕食を差し入れしているが、このような状況は会の結成以来の伝統となっている。また、女性教員は島への赴任と同時に愛好会の会員となっており、現在もバレーボールの経験の全くない2名を含む3名が参加している。

島の学校は文化の中心地であり、かつ網地島の場合、若者がほとんどいないことから(20歳代の島民は他に2名がいるだけ)、人的にも島の行事や生活の様々な領域で中心的な存在となっており、また自らも積極的に参加し、そこに楽しみを見いだしている。島の生活の中では、独身の若い教職員が勤務後遊び等に行くところはほとんどなく、子どものスポーツ少年団の指導や部活動の相手、また後述の地域の様々な活動に積極的に関わることになる。このように学校ならびに教職員は地域社会と一体となってお

り、このことが脆弱な基盤の愛好会の活動とその存続に大きく影響しているといえる。

### 4. 指導者のリーダーシップ

これまでの愛好会の代表者は、前任者のTOさん(平成3年、他の活動(カラオケ教室主宰)が忙しいことから退会)と、現在のSAさん(設立当初からの会員で、平成3年TOさんの推薦で代表となる。またこの年から牡鹿町の体育指導委員に任命されている)の2名である。

わが国の地域スポーツ・クラブは、愛好会同様、設立の歴史も浅く、20人未満の単一種目小規模クラブが大半であるが、そのような組織的な運営能力のない小さなクラブでは代表者の性格や指導力が会の存亡を左右するといっても過言ではないだろう。愛好会の場合も、これまでの代表者二人の社交的で明るい性格と、会への献身的な参与と指導力が大きな役割を担っていると考えられる。このことは二人の地域社会での様々な役職をみれば証左されよう(表3)。

前代表のTOさんは、36歳の時に愛好会が設立され代表に推されるが、当時、PTAのクラス委員長として、同年代の母親の中心的存在であった。PTAを母体として発足した愛好会で、バレーボール経験のない彼女が代表となったことも十分に首肯できる。その後、コミュニティ推進協議会の体育部長や、現在は表3のような様々な地域の要職にあり、島の中心的な女性といえる。現在53歳であるが、週4回、カラオケ教室の指導に飛び回り、さらにアワビ漁に海にも潜るという若さと元気さを持ち合わせている。本人は「何にでも一生懸命になってしまうタイプ」と笑うが、大会の祝勝会や反省会によく自宅を開放するなど、彼女の社交性や積極性が愛好会の活性化にはなくてはならないものであったと感じられる。

現代代表のSAさんは網地島生まれで、結婚後一時札幌にいたが、昭和53年家族で帰島し、夫婦で美容院を経営していた。平成3年、夫が病

死するが、その後一人で美容院とスナックを経営する努力家であり、また社交家でもある。彼女もバレーボール経験はないが、会への積極的な関わりと彼女の「ひととなり」、また TO さんの退いた当時最も年長であったことから代表に推され、同時に町の体育指導委員にも推挙されている。島で唯一のスナックは、島での行事の度に島民や教職員に利用され、島の社交場となっている。彼女は愛好会の今後について、会員を増やすことは無理ではあるが、これからも学校や先生方の応援を戴き、できる限り頑張っていきたいと明るく話している。

中島<sup>7)</sup>の野球チームの存続・崩壊要因にみられるリーダーの役割や、中島<sup>6)</sup>が詳細に記述する塩釜フットボールクラブ創始者の个性的で強力なリーダーシップによっても明らかなように、「長渡バレーボール愛好会」も、代表者2名の果たした役割と会への貢献があったがゆえに

結成され存続してきたといえる。

## 5. 会員の地域リーダーとしての存在

代表の SA さんも当然であるが、現会員の残り7名も、島の中心的な女性達である。島の同世代の女性の約1/4が愛好会の会員でもあるが、比較的若い3,40歳代の島民が少ないことから、島の様々な生活領域で、彼女達が実質的な生活、文化の担い手となっている。表3のように、若く、元気で積極的な彼女達会員は、特に体育、レクリエーション分野で島の生活を支えているといえよう。島の年間の主な地域行事には、神社のお祭とその前夜祭としての演芸大会(4月)、盆踊り(8月)、小中学校・島民合同運動会(9月)、コミュニティ・バレーボール大会(10月)、その他コミュニティ活動として浜の清掃と草刈などの作業があるが、盆踊り(観光客

表3 「愛好会」会員の職業と地域住民組織への加入状況

会員	年齢	職業	コミュニティ	婦人会	PTA	消防団	交通安全協会	その他
TO 前代表	53	主婦	○ レクリエーション部 委員	○ 副会長		○ 副分団長	○ 監査監事	カラオケ教室会主
SA 現代表	46	美容院・ 飲食店経営	○ 体育部委員			○	○ 班長	体育指導委員 (夫死別)
EA	41	漁協職員	○		○ 体育委員	○		
MS	44	主婦	○ レクリエーション部 副部長		○ 体育委員	○		牡鹿町保健委員
NA	43	漁協職員	○	○	○ 体育委員	○	○ 班長	
HA	36	漁協職員	○ 体育部委員	○	○ 地区委員	○	○	
KA	34	家業手伝い (食料品店)	○ 体育部委員			○	○ 班長	(独身)
YA	39	診療所事務員	○ レクリエーション部 委員	○	○ 研修委員	○		
KO	40	労務職パート	○	○	○ 体育委員長	○		

のために開催される意味合いが強く、今年度は中止された)以外には、会員は積極的に参加し、かつそこで中心的な役割を果たしている。

会員の階層をみると、学歴は会員の中でも若いHA, KAさん以外は中学校卒ではあるが、職業的には漁協職員、診療所事務といった島では威信の高い職業についている人が多い。また、独身の2名以外の会員の配偶者の職業も、ふだん島に在住するEA, NAさんの夫は、島では4人しかいない銀ザケ養殖業を営み、他の4名は遠洋漁船またはタンカー船乗務で、この6名の世帯収入はかなり高い。このように会員の社会階層は島では相対的にかなり高いことが窺える。

地域社会の活性化には上述のようなスポーツ・レクリエーション行事を欠かすことはできない。青壮年男性の少ない網地島では女性達はその役割を担っているが、その中でも愛好会会員は、年齢的にも体力的にもまた階層的にも比較的恵まれていることもありその中心となっている。彼女達には島の生活を実質的に支えているリーダーとしての自負としたたかきがあるといつてよいだろう。

## 6. 島の生活と余暇活動

最後に網地島に特徴的な島の生活が、愛好会会員のスポーツ活動にプラスに働いている面をいくつかみることにする。

まず高齢者が多く、またその中でも比較的若い男性の多くは刺し網漁などの沿岸漁業を行っているため、島の夜(就寝時間)は非常に早い。漁師の多くは早朝3時半頃起床し、4時半には漁に出ているという。したがって、愛好会の練習の始まる夜の7時頃には雨戸は閉まり人通りも全くなくなっている。夜練習に出ることに対する近所の目もほとんど気にならないということであった。また会員のうち6名は舅、姑などの年寄りと同居しているが、就寝の時間であることと、家事を済ませてから出かけるということで、ほとんど問題はないようである。しかし、

かつて会員が若い頃には夜間外出することに心理的な抵抗もあつたらしく、わざわざ有線放送で練習日であることを知らせたり、子ども(中学生のバレーボール部員)と一緒に練習に出ることがあつたという。さらに、会員中6名は独身かふだんは夫が家におらず、夫の不在という状況も夜間外出することに関しては好都合であつたと思われる。

島の生活には娯楽や余暇活動は極端に少なく、会員の余暇生活も独身の2名を除いては決して豊かなものではない。したがって、前述の地域行事への島民の参加率は非常に高く、運動会や演芸会には200名程度(在住島民の1/3であるが、女性は大半が参加する)、コミュニティ・バレーボール大会にも80名程度が参加する。このような行事を島民は非常に楽しみにしており、そこでルーティーン化した日常生活から離れ、新鮮な興奮と刺激を得、さらには親族や島民同士の絆と交流を深めるのである。様々なイベントに対する島民の熱の入れようはすさまじく、運動会の応援一つをとっても、その激しい応援の仕方は古くからの伝統で牡鹿町でも名物となっている。そして昼食時には、もはや他の地域ではめったに見かけられなくなった光景であるが、一族が車座になって目一杯のご馳走を並べ談笑するのである。

このようなイベントの「祭」としての機能は今後の検討課題であるが、娯楽の少ない島の生活の中で、愛好会の会員がバレーボールに生き生きと熱中するのも、ただバレーボールが好きというだけの理由からではないと思われる。島には女性達の趣味のサークルとして、「踊りの会」2サークルと愛好会前代表のTOさんの主宰する「カラオケ愛好会」がある。いずれも10数名の会員を擁し、前述の演芸会や町民芸術祭での発表を目標にかなり活発に活動している。小さな閉鎖的な島の社会の中で、「バレーボール愛好会」を含め、このような余暇集団が幾つも存在し、また活発に活動する理由は、やはり島の生活の中に求められよう。詳細な検討はこれ

からであるが、日常生活の倦怠や常軌性からの逸脱と主体性の回復・確認という意味をもってはいることは確かであろう。「島の生活はのんびりしていて良い」と島民は必ず話してくれるが、だからこそ逆説的に日常生活からの逸脱意識はかなり強いといえよう。したがって、「バレーボール愛好会」は島の歴史の中で生まれるべくして生まれ、存続してきたといえよう。

## ま と め

「長渡バレーボール愛好会」は、このように非常に特異な社会環境の中にあって、地域に密着し、またその中で意味をもった形で存在している。会員は、島民の中では、年齢的にも階層的にも比較的恵まれた人々である。島の生活や文化の実質的な担い手であると同時に、学校や教職員と協力し合い、また彼らをうまく取り込み、20年近く活動を続けてきた。廃校の危機や会員の退会という不安を常に抱えてはいるものの、現在の会員の多くは、自らが、主体的な島の生活実践者であるという自負をもっているようで、そんな不安はおくびにも見せない。

わが国の地域のスポーツ・クラブの多くは、行政主導のもと、単にスポーツを行うためだけの機能集団として存在し、いわゆる「コミュニティ・スポーツ」という視点からは批判されてきた。規範的な「コミュニティ・スポーツ」の

概念とは別に、本研究対象の「長渡バレーボール愛好会」はやや特殊ケースではあるが、島の生活の中で必然的に生まれた自然生長的、かつ生活に密着したコミュニティ・スポーツ・クラブといえよう。

(本研究は、平成8年度「仙台大学研究計画に基づく研究費」(代表仲野隆士)を得て行われたもので、要旨を第5回宮城体育学会で発表した)

## 参考文献

- 1) 厨 義弘, 大谷善博著:「地域スポーツの創造と展開」, 大修館, 1990, 84頁。
- 2) 松村和則:「地域」におけるスポーツ活動分析の一試論, 体育社会学研究 7: 65-98, 1978.
- 3) 松村和則, 前田和司: 混住化地域における「生活拡充集団」の生成・展開過程, 体育・スポーツ社会学研究 8: 119-137, 1989.
- 4) 長屋昭義, 鈴木一央, 三好洋二: 農民の生活とスポーツ, 体育・スポーツ社会学研究 6: 171-193, 1987.
- 5) 中島信博, 上羅 廣: 地域社会におけるスポーツ, 体育社会学研究 4: 67-86, 1975.
- 6) 中島信博: 地域スポーツシステムの構築に関する研究, 東北大学教育学部研究年報 44: 1-16, 1996.
- 7) 中島豊雄: 地域スポーツ集団の社会学的研究, 名古屋大学教養部紀要 16: 59-84, 1972.
- 8) 中山正吉: 地域のスポーツ研究の軌跡と課題, 体育・スポーツ社会学研究 10: 35-50, 1991.

(平成8年10月30日受付, 平成8年12月17日受理)